

第32回BELCA賞 ベストリフォーム部門選考評

BELCA賞選考委員会 副委員長 深尾 精一

今回のBELCA賞表彰件数9件の中で、ベストリフォーム部門で表彰されたものは、8件であった。昨年まで三年連続で7件であったものが、更に増えたことになる。リノベーションによって建築ストックを活用しようとするのが、さらに大きな流れとなっていることの表れであろう。

8つの建築の当初の建設年をみると、戦前に建設されたもののリノベーションが3件あり、そのうちの2件は用途変更がなされている。また、戦後ではあるが1970年以前に建設されたものが3件あり、1980年代のものが2件あるものの、今回は比較的古い建築物のリフォーム事例が多い結果となった。

煉瓦造の倉庫、初の本格的な鉄骨造のテレビ塔、RC造で建設された城郭建築など、バラエティに富んだ建築が選ばれており、建物用途も多岐にわたっていることが特徴である。

また、用途が変更された、いわゆるコンバージョン建築も5件あり、テレビ塔にホテルの機能を組み込むなど、意欲的な試みがなされている。

当初の建設年が最も古い「弘前れんが倉庫美術館」は、我が国の煉瓦造としては後期に属するもので、工場として建設されその後倉庫として使われていたものを、PFI事業によって美術館として蘇らせた事例である。スパンの大きな煉瓦造の活用には、様々な課題があったと思われるが、煉瓦内部にPC鋼棒を挿入するとともに、内部空間に構築したRC造のコアによって耐震化が図られている。新たに手を加えた部分と、既存の部位を巧みに調和させ、変化に富んだ展示空間を生み出しており、魅力的な美術館となっている。

「大倉集古館」は、1927年に伊東忠太の設計によって建設された、国内初の私立の美術館である。このたび、隣接するホテルオークラの建替えに合わせて改修が計画され、全体配置計画の結果、6mほど曳家をするとともに地下を増築し、免震レトロフィットを行っている。内部装飾の再生などの修復とともに、既存の銅板屋根を利用した二重化工法を採用するなど、文化財級の建築を見事にリフォームしている。当初の建設後に増築されていた収蔵庫・事務所棟を取り壊し、周辺道路からの景観を一新していることも評価すべきであろう。

「立誠ガーデン ヒューリック京都」は、1928年に建設された京都市立の立誠小学校を、ホテルと図書館・自治会館などの地域施設にコンバージョンした事例である。自治会などの地域と京都市などとの連携によって出来上がったプロジェクトであり、旧校庭は市民に開放された魅力的なひろば空間となっている。ホテルとしては新築部分の大きい計画であるが、旧校舎の部分も客室としても使われている。また、高瀬川と平行する街路からのアプローチ空間として、効果的にリノベーションされている。

<次頁へつづく>

1954年に建設された「中部電力 MIRAI TOWER（名古屋テレビ塔）」は、テレビ放送のための施設という役目は終わっていたが、名古屋の中心部に聳え立つシンボルとして、どのように活用していくのがよいか問われていた。その解として、観光展望施設としての機能は残したまま、ホテルや飲食・商業施設を組み込むという、極めて意欲的なコンバージョンがなされている。鉄骨の斜材が剥き出しとなったホテルの客室なども興味深い。内藤多伸博士による工夫を凝らした構造設計を前提とし、巧みな免震化を行っていることも高く評価できる。

「熊本城天守閣」は、1960年に鉄筋コンクリート造によって忠実に復元された構造物であるが、2016年の熊本地震によって瓦が崩落するなどの被害を受けていた。大きな被害を受けた石垣と建築物との関係を整理し、既存の杭へ負担をかけないようにするなど、様々な制約の中で、見学施設としての安全性を高める改修を行っている。バリアフリー化を進めるとともに、避難安全性を格段に向上させるなど、震災復興のシンボリックな工事にとどまらず、設備の大規模な改修などを行い、安全で快適な観光施設として蘇らせている。

「日本武道館」は、1964年の東京オリンピックのために建設された、スポーツ・多目的ホールである。2020年に予定された二度目のオリンピックに合わせ、柔道という同じ競技の会場として整備されたものである。50余年の時を経て、部材劣化への対応と、競技会場として高まった要求レベルに応えるべく行われた改修工事である。屋根をステンレスで葺き替え、荷重を低減させることにより、イベント時などに用いられる吊部材への対応荷重を高めることなども行っている。また、設備の改修による省エネルギー化も特筆される。

「万葉公園 湯河原惣湯 Books and Retreat 玄関テラス」は、二期に渡って建設された観光会館を改修し、奥に広がる万葉公園の玄関口になる観光案内所と広場を創り出した建築である。1984年建設の4階建ての観光会館を2層に減築し、旧耐震の1962年建設の部分はウッドデッキ広場を支える基礎躯体として再利用しているが、その結果、公園の玄関口に相応しい、引きのある景観を創っている。観光客が気軽に立ち寄れる、立体的な場を構築することに成功しており、奥に広がる緑豊かな公園と一体化した建築は、元の建築からは想像しがたいものとなっている。

「千葉大学墨田サテライトキャンパス」は、1985年に建設された墨田区の中小企業センターという厚生施設を、デザインを中心とした大学の教育の場に再構築したものである。くの字型の既存建物の屈折部を大胆に改修し、手前と奥の屋外スペースを連続させるなど、敷地条件を活かした優れた改修設計となっている。また、既存のスケルトンを活かしながら、デザイン教育に相応しい多様な場を構築し、学生の生き活きとした活動を誘発するようなキャンパスとなっている。ワークショップの実施など、キャンパス建設のプロセスも評価できる。

以上のように、今回のベストリフォーム部門の表彰対象は、昨年に引き続き、当初の建築がバラエティに富んだものであるとともに、リフォーム後も様々な形で優れた活用がなされたものとなっている。この傾向は、今後続くことであろう。